

川確治（明治三十八年卒）は東京美術学校彫刻研究科在学中の頃、彼と相知ったが、「建畠大夢氏」（『中央美術』第三卷第十二号。大正六年十二月）の中で次のように述べている。

建畠君の性質は氏の製作にも現はれて居る通り至極温厚篤實の好人物である。一體藝術家と云ふものはとかく粗暴に流れ易いものであるが、氏は決してそんなことのないごく圓滿の人である。建畠君の秀才であることは學校時代から文展に製作を出して常に優賞をとつて居られたのに徴しても知れる。その當時美術學校には秀才優待の意味から正規の年限は五ケ年でも秀才と認めれば一年或は二年も一足飛びにあげられる規則があつたが、その規則を彫刻科に於て最初に適用されたのは建畠君であつた。そして同氏はたしか皆より一年早く學校を出られたと思つて居る。建畠君の學校へ入學した當時建畠君に就いて評判の面白い話があつた。それは當時の彫塑科の主任教授の白井兩山氏がよく學生の居る處に來られると、此度建畠と云ふ大變上手な人が來たからぐづ／＼して居ると追ひ越されてしまふぞと云はれたことである。皆はどんな上手な人かと思つて見に行くところ程上手なので感心した。その白井先生の言葉通り建畠君はぐん／＼他を追ひ越して年々優秀な作品を見せてくれるのは誠に喜ばしく思ふところである。

このように建畠は秀才にして温厚篤実、よく子供を題材にして快い作品を作り、金儲けが拙く（前掲書）、俳句を趣味とするような人だった。『東京美術學校校友会月報』にも時々その俳句が載つて

いる。なお、彼はかつて北村西望とともに、白井兩山の家の離れを借りて自炊生活をしながら美術學校へ通つたという（苦闘の人横江君「建畠大夢『中央美術』第十四卷第一号。昭和三年一月）。教授時代については建畠寛造が『建畠大夢』（昭和十八年）の中に次のように記している。

大正九年二月、東京美術學校教授になつた。そして木彫部の生徒らが、むかし乍らの板彫のお手本に興味なく嫌らぬものあるを見て、モデルを使はさなければいけないなど、後に來るものらの爲めに教授上の革新を叫んだ。また塑造部の生徒の習作に對つて『よくモデルを見よ』『こんな足で歩けるか』と、無遠慮に指導した。「この簡單にして、しかも含蓄ある言葉は、よく物の要點を衝いてをり、生徒間に敬慕されて、教授中で一番人氣があり、萬年青鉢のニックネームを奉られた。

④ 日本画科生徒の要求

大正九年四月末五月初の「諸新聞切抜」（本學附屬圖書館藏）を見ると、日本画科一年生による教育法改革要求に関する記事が散見する。外に記録資料が現存しないため、詳細な経緯は不明であるが、生徒の活動の一端を窺うに足る出來事なので、上記の新聞記事を抜粋しておく。

東京美術學校生徒の試験撤廢運動

日本畫科が先づ鋒火を擧げて五箇條の要求を提出した

豫て試験撤廢と學科目の改造を呼びつゝあつた東京美術學校學生は先づ日本畫學生に依り其火蓋を切り同部學生百八十名は二十八日午後の放課時間を期して教室に集合し協議を擬らした結果要求事項

一、試験を撤廢すること

二、實習時間の増加

三、第二學科の時間減少

四、一年毎に學生の畫を提出し其實力に依つて卒業を早むること

五、圖案法廢止

之に就き一教授は語る「此要求は特に技術學校としては當然で決して無理とは思ひません 而し斯く學生側が不穩の舉に出るのは全く學校としては困るのです 唯此要求を容れるとか容れられる^{〔マコ〕}とかは學生の態度一にある事で此要求は日本畫のみでなく各學科を通じて近く實施しなければならぬことと思ひます

殊に第四項に就ては前校長が率先して實行しやうと迄論ぜられたことです、又試験撤廢も豫て行つた所があるのですから必ず近い中に實行しやうと思つて居ります」云々（東京電話）

（大正九年四月三十日『大正日日新聞』）

美術學校生の希望容れられる

結城素明畫伯の訓示に學生満足して問題解決

〔大正九年五月一日東京日日新聞〕

〔五・一東日〕 昨記東京美術學校日本畫科學生の學科目、其他改

造要求に對し昨日午前十一時より教授結城素明氏は右學生を一室

に集め、「學生が提出の五箇條の問題は四五年前から正木〔直彦〕校長の希望にて既に原案の起草成り目下校長の手にあるものと同趣旨なれば、聽て今回の學生の希望と一致實現する期あり。暫らく機を待つべし」と懇に訓示したので學生等も旨を領し散會しこれにて解決を見た。結城素明畫伯は語る「全く正木校長の希望と今度の問題は一致してゐる。右希望提出者は主に一年の學生であつたから學校の素志を了解せなんだ爲めで、右の旨を話したら何れも満足した。前述の原案が實施の日は學年制から實技本位制になる筈である」云々

猶昨日同校に於て川合玉堂畫伯が學生に對し新學期の訓示をした爲めに學生提出の五箇條を玉堂氏が許容訓示した如く傳へられたが夫れは誤解に過ぎぬ。

（『新聞集録大正史』第八卷、昭和五十三年、大正出版K・K）

⑤ 製版科、臨時写真科、彫刻科牙彫部の生徒募集停止

製版科と臨時写真科は芝浦に設立が予定されている東京高等工芸學校に移転することになったので、本年から生徒募集が停止された。ただし、臨時写真科の方は移転に関して「一種のトラブル」が起こり（鎌田弥寿治『日本写真教育史』昭和五十年、東京写真大学短期大學出版部）、移転が延びたため、大正十一年から募集が再開された。

牙彫部は本書第二卷（786頁）に記したように大正六年から専門教育を停止し、全く有名無実となつていたので、本年度からは生徒募集も打ち切つた。